青山同窓会会報

発行所
青山同窓会
新潟市関屋下川原町二
新潟高校内
発行人　斉藤希弌
印刷所　オリオン印刷㈱

四十四年総会

総会は母校会議室 懇親会は小林・食堂で開催

前号の会報で報告したような事情で、初めて総会と懇親会を二つの会場に分けて開催した。

慎重に計画を練って万全を期したつもりであったが、結果は予想外のところに盲点があって、あっさり失敗してしまった。

計画では、定時に開会して四十分で総会次第を終了、出席者を二台のバスで小林へ運び、六時には懇親会を始められると計算したのだが、進行を一瀉千里で強行してもバスが動き出したのが既に六時を過ぎていた。もう一つ完全に失敗だったことは、小林の閉店時間が過ぎると、エレベーターが一台しか動かないことだった。結局開宴は六時半を廻って、定刻までに会場へ来ていて下さった諸兄にはえらいご迷惑をおかけしてしまった。

そうかといって、総会の開会時間を引き上げることは、はっきり出席率に影響することが眼に見えているので次回は少し頭が痛い。

○総会　七月四日午後五時より母校会議室で開催。

一、挨拶　鍵富会長
二、挨拶　渡辺校長
三、会務報告　斉藤幹事長
四、東京報告　東京青山同窓会　会湊元幹事長
五、議事
(1)昭和43年度決算報告
(2)昭和44年度予算審議
(3)役員改選

右(1)(2)は原案通り承認、(3)は留任と決定。

○懇親会　総会終了後バスで懇親会場（小林百貨店）へ案内。
出席者　二四五名

宴半ばにして例に依り出席優良の期に対する表彰あり。先輩寄贈の飲みもの又多量、歓を尽して散会。

懇親会スナップ

母校 封鎖さる

幹事長　斉藤希弌

その時、昭和四十四年十一月八日夜半、わが新潟高校は、突如として一群の暴力団の手に依って、あっという間もなく封鎖蹂躙されてしまった。

彼等は周到な計画のもとに、つむじ風のように襲って来て、冷静にむしろ秩序整然?として暴虐の限りを働いて、機動隊の出動する前に忽ち姿を消してしまったのである。

この暴力団が、もしギャングもどきの悪党共の一味なら、恰好のスリラー劇の一幕であったろうが正体は、大学生が指揮し少数の本校生徒を含む数十名の高校生の外人部隊―彼等自身最も進歩的思想を自負する歴とした学徒であったのである。

その数時間後、報告を受けて訪れた私は、まだ跡片づけの終らぬ現場の想像に絶する惨たんたる暴状を眼にして、ただ呆然と言葉もなく胸が痛んだ。

われわれにとってこの校舎は、単なる母校の一建造物であるだけの存在ではないのである。昭和二十九年の全焼以来十幾年、その復興を悲願とした全同窓の汗と涙の手塩に掛けて竣工させた母校愛の一心の理解と同情を弄する言辞を耳にするが、私はその日のその時点に於ては、それに甘えて増長した猿廻しの猿のような彼等乳臭児を、腹の底からひと筋にただ憎み、そして且つ憐れんだ。

この一・二年、反戦平和、体制打倒を旗印に、若者の暴力が大学有形の象徴なのである。

彼等のこの暴虐行為の意図した目的は一体何であったのか。彼等の常套句を以って一言にして返せば、曰くナンセンスである。

世上往々にしてしたり顔に彼等の志と心情の純なることを謳って一心の理解と同情を弄する言辞を耳にするが、私はその日のその時点に於ては、それに甘えて増長した猿廻しの猿のような彼等乳臭児を、腹の底からひと筋にただ憎み、そして且つ憐れんだ。

この一・二年、反戦平和、体制打倒を旗印に、若者の暴力が大学と街頭に荒れ狂い、その狂熱の波動が当然と高校生をも捲き込みつつある現象が、既に幾多の高校に於て惹き起こされているところであった。

豈ひとりわが新潟高校のみが超然と無風地帯であり得る条件はないのである。いわんや現に校内外にその可能性を暗示する一連の動きは、歴然として関係者には事前に察知されていた事実があったのである。

そして、事は遂に最悪の事態となって発生した。

それからは、正に全青陵を震憾させた二週間が過ぎて行ったのである。

重大な危機が、いかにして収拾されたか。

同窓会はいかにしてこれに対処したか。

本号別面のこの問題の特集が、具さにそれに答えてくれることを期待する。

われわれは学校当局の堅忍と辛労を多とすると共に、在校の後輩諸君がこの厳しい風雪の試練を克服して、愈々その志操を堅持することを希うものである。

乾杯！

東京青山同窓会

同窓、総選挙に当選

旧臘十二月二十七日施行された総選挙に、同窓三十九回阿部助哉氏は本県第二区より立候補、当選した。

東京青山同窓会報告

東京青山同窓会総会は、十二月一日夜、前回と同じ会場の東京丸ノ内・日興証券ホールで開催された。

本部から鍵富会長、斉藤幹事長らが、母校からは内山先生が学校長の名代として、また本部事務局の紅一点、岩田さんが例の笑顔で花を添え、渡辺新潟市長も激務のさなかをかけつけてこられた。

さらにかつての名物校長礒幸次郎先生（浦和市在住）が「ケガなく」ご壮健なところをみせ、大正・昭和の二代にわたって母校で教鞭をとられた斉藤勝先生（群馬県藤岡市在住）も「青山健児の意気をみたい」と、百里の道をものともせずにおいでくださった。

この会のシンボルともいうべき山内保次将軍（七回卒、東京青山同窓会名誉会長）が、青年のような足どりで勇姿をみせたのを筆頭として、この日集まった同窓生はおよそ二百八十名。東北や北九州からの参加者もあり、七十才、八十才代の大先輩もかなり出席され一方ではミニスカートの乙女達も多数いりまじって、出席者の目を楽しませるに充分であった。

人いきれでムンムンする会場のいたるところでは、蛮声をはりあげて在学時代の応援歌を歌う者あり、旧友とはしゃぐ者あり、シンミリと語り合う者あり、また、恩師と教え子が三十年ぶりに相まみえて感激の涙するシーンもあって歌あり笑いあり涙ありとバラエティに富んだ雰囲気の中で、次回の再会を約束しあって盛会裡に散会した。

故宮尾益一郎副会長を偲ぶ会

前々年十一月逝去された宮尾さんを追慕する人たちの間で、先生を偲ぶ一夕を持ちたいという念願が実って、昨年七月二十一日午後五時半、新築オープンした新潟駅前のシルバーホテルで、故人と因縁の深い不識庵同人と共同主催の形で、下記二十二名が参集して開らかれた。

全員一人一人が感慨を寵めて静かに故人の思い出を語り合い、思い新らたに数々の遺徳溢れる大人格を偲んで、心暖まる佳き一夜であった。

最後に、嗣子益克さんが鄭重なる謝辞を述べられて、午後八時散会した。

出席者（卒業回数順）
斉藤義臣、青山貞三、鍵富清一郎、青山松一郎、原隆太郎、大滝田七郎、本田弥太郎、坂井義衛、山崎徳佐、伊藤敬太郎、斉藤希弌、小野塚忠義、渡辺芳雄、小山久一、草野孝行、宮尾正雄、井村正樹、宮尾益夫、田中松一、宮尾益克、石川健四郎、岩田はす枝

母校元校長石川先生は、市の教育長として、市の教育委員であった故人との深い縁で、特にご参加していただいた。

昭和43年度青山同窓会収支決算書（自43. 4. 1 至44. 3. 31）

収入の部

科目	金額	備考
繰越金	132,240	前年度繰越金
入会金	164,700	全日制生徒1人100円×1,467人＝146,700円 通信制卒業生1人300円×60人＝18,000円
新卒業生会費	473,400	全日制卒業生1人500円×500人＝250,000円 全日制1・2年生1人200円×967人＝193,400円 通信制卒業生1人500円×60人＝30,000円
会費	396,000	同窓会員1口500円　792口分
雑収入	4,277	会報広告料 1,000円　預金利子 3,277円
合計	1,170,617	

支出の部

人件費	166,100	職員1人給料手当
通信費	116,455	会報発送、総会、新年会、役員会案内郵便料、振替料負担金
印刷費	22,250	封筒、振替用紙、案内状、印刷代
慶弔費	89,440	会員慶弔電報料、香華料、宮尾副会長死亡新聞広告料、退職職員記念品料
雑費	7,984	消耗品費、失業保険料負担金
会報印刷費	156,200	年2回発行　会報印刷代
会議費	153,530	総会、新年会、役員会等会議費、各期クラス会寄贈酒代、東京総会、支部総会出席会費並に旅費
卒業生記念品代	96,000	卒業生におくるバッジ、湯のみ代
青陵祭補助	9,400	青陵祭ポスター印刷代
予備費	23,000	東京同窓会名薄作成補助金 20,000円 ボート部全国大会出場補助金 3,000円
合計	840,359	

収支差引残高 330,258円　残高の処理　基金へ繰入 200,000円
次年度繰越 130,258円

昭和44年度青山同窓会収支予算書（自44. 4. 1 至45. 3. 31）

収入の部

科目	金額	備考
繰越金	130,258	前年度繰越金
入会金	157,000	全日制生徒1人100円×1,420人＝142,000人 通信制卒業生1人300円×50人＝15,000円
新卒業生会費	260,000	全日制1・2年生1人200円×930人＝186,000円 全日制3年生1人100円×490人＝49,000円 通信制卒業制1人500円×50人＝25,000円
会費	400,000	同窓生1口500円　800口分
雑収入	5,000	広告料、預金利子
合計	952,258	

支出の部

人件費	185,000	職員1人給料、手当
通信費	150,000	会報発送、総会、新年会、役員会案内郵便料、振替料負担金
印刷費	30,000	封筒、振替用紙、案内状、印刷代
慶弔費	35,000	会員慶弔電報料、香華料、離任職員餞別代
職員退職手当積立金	50,000	今年度より積立する
雑費	12,258	諸雑費
会報印刷費	150,000	年2回発行　会報印刷代
会議費	150,000	総会、新年会、役員会、会議費、クラス会寄贈酒代、東京総会、支部総会出席会費並に旅費
卒業生記念品代	100,000	卒業生におくるバッジ、湯のみ代
青陵祭補助金	10,000	
通信制補助金	10,000	通信制青山同窓会へ補助金
予備費	70,000	
合計	952,258	

収支差引残高　なし

母校ゲバ封鎖される！

昭和四十四年十一月八日未明、新潟高校がゲバ封鎖された。本校歴史上かってなかったこの事件は、校内外に多大な衝撃を与えた。

マスコミは特に、「新潟県にも高校生の政治闘争の波押し寄せる」と、センセーショナルにとりあげたが、校内では、ゲバ封鎖に至らねばならない必然性が無かっただけに、教師や多数の生徒はこの暴挙に憤り、強く抗議したのである。

大学紛争に端を発した学生の政治活動が高校にも波及し、高校教育の改革を旗印にエスカレートしてきていることは事実である。また、改革の必要を求められる問題がないとはいえないのも事実である。しかし、その改革は、校内での数々の話し合いを通して建設的に、しかも慎重に進められるべきものである。

しかるに、今回の封鎖騒ぎの特徴は、「封鎖」が事実上過激な一部生徒と本校生以外の部外者によって行われたということである。

本号では、この封鎖事件に焦点を合わせ、封鎖に至るまでの経過、封鎖の状況、それにこの事件に関して寄せられた同窓生の御意見を特集してみた。

あの日からすでに三ケ月、校内外にまだまだ多くの問題を残している。同窓の皆様に、ぜひこの特集記事を読んでいただき、本校のより良い将来のため御協力をお願いするものである。

全校生徒諸君へ　政治活動に関する統一見解

新潟高等学校

最近、高校生の政治活動が激化する傾向にあり、本校でもこれについて問題が提起されているので学校の見解と態度を明らかにして全校の生徒諸君の判断に資することにした。冷静、慎重な考慮を切望する。

一、高校生の政治活動について

生徒諸君が、政治的教養を高め政治について理解を深めることは大切なことであって、学校はこれを否定するものではない。すなわち、政治について知性に訴えた研究的な集会・弁論・討論（たとえば、同好会スリック・文化祭の弁論・討論会等）は、十分認めているところである。しかし、原則として、高校生が政治上一つの明確な主義主張を掲げて、他に訴えあるいは他の同調を求めるために、その意志を集団的行動に表現する場合は、実に多くの問題が含まれているので、切に自重を要望せざるをえないのである。

たとえば、現実の政治活動においては、党派、派閥の争いに巻きこまれることもないとはいえない

派閥の分裂や抗争をまでも諸君が学ぶことはないはずである。そうした事態を免れたとしても、派閥の持つ閉鎖性、割拠生が校内に持ちこまれるとしたら、決して好ましい影響を及ぼすとは思われない。

派閥性の弱点を解消したところで、特定のイデオロギーに支配される束縛からは逃れがたい。一体高校生という知的準備段階で、政治に特に強い関心を持った場合、まず、何が必要だろうか。政治の本質について、多様な主義思想について、それらの史的展開や是非得失について等々の、基本的な問題の究明が必要であろう。なぜならば、そういう過程を、たとえ一部分でも経ていないと、自分が最初にめぐりあった特定の思想や主張を絶対的なものと盲信し、思考力の柔軟性も発展性も失うからである。広い視野と展望を持たず、狭小な立場で一つの思想を絶対視した場合、その思想は固定し、偏向し、狂信となり、およそ思想という名に値しないことが多い。

特に警戒しなければならないのは、政治的関心のみに心を奪われて、他の知的欲求を放棄した時にそこに生じる知的アンバランスは自己の将来に大きな禍いを残す危険があるという点である。もし、諸君が後日の発展と大成を期するならば、バランスのとれた知的活動をこそ目標とするべきではないか。

次に、諸君は、今精神的にも肉体的にも、一生のうちで最大の成長期にあることを忘れてはならない。いわば、限界を知らない可能性を秘めている時期である。それが早くも、特定の理論の中に自己限定を行って、せっかく与えられている可能性を見捨てるのは惜しむべきことである。柔軟な成長期こそ、幾多の思想の間をさまよいながら苦闘を経験すべき時期ではないか。強靱な思考力はこうして養われるはずである。こういう基盤の上に立つとき、多様な主義も理論も深い理解が可能となり、また現状に対する精密な分析も可能となろう。性急な自己限定は、一種の諦めに通じ、降服に近い。

また、青年時代は感情が極めてナイーブな為、刺激に対して鋭敏に反応し、激しく興奮しやすい時期である。さらに苦難の道をたどったという経験にまだ乏しいことから、感情の制御装置となる意志の力の弱い時期でもある。この二つが重なると、一時の感情にまかせた、思いがけもない暴走をあえてするということも少くない。その上さらに、集団心理が働いたならば、非常な危険を伴うことはいうまでもない。諸君の正義感が、もし暴走の原動力となるならば、周囲に及ぼす影響があまりにも大きいのみならず、当人自身の為にも、実に惜しむべきことである。

以上に加えるに、政治の世界の複雑さを思う時、諸君に自重を要望せざるをえないのである。

自重を要望するとはいっても、具体的には何の方策も見出せないと思う人もあろう。そういう人の為に、次のことを明らかにしたい

すなわち、政治活動の個々の場合に応じて、担当の先生との話し合いの機会を持ち、そこで自己のありかたを考えるということである。一つ一つの事例ごとに話し合って、それぞれの場合の妥当なありかたを見出してゆくこと、それが、今の時点ばかりでなく、今後においても最も必要なことではあるまいか。

二、校内における「表現の自由」について

諸君の中から、政治活動の問題に関連して、「表現の自由」を求める声が出ている。政治活動だけに限らず、すべて「表現の自由」は、基本的人権として尊重されねばならないことはいうまでもない。

反面、「表現」には当然それを受ける相手が、必ず存在していること。及び、他人の「表現の自由」もまた尊重しなければならないことも、自明の理である。また、無制限の自己主張は、集団の秩序をも破壊しかねない。従って、一般の社会においても、公共の福祉に反するような、極端な自己主張は認められない。まして、教育という目的を持った学校においては、当然、「自由」の濫用を自制するだけの良識が働かねばならない。

たとえば、一時的な思いつきやその場限りの無責任な放言が横行するならば、その発言者は軽卒のそしりを免れないばかりか、「学ぶ者」としての姿勢にも欠けるところがあるといわねばならず、学校自体も教育という目的を実現するに困難となるであろう。また校内にビラやポスターが氾濫するならば、教育の場として不適当というべきであろう。さらに誇大なあるいは虚偽の宣伝、時には他人の人権に対する侵害までもひき起すならば、その当事者は「学ぶ者」としての資格が疑われ、学校もその名に値しないといっても過言ではない。

憲法は「表現の自由」を保障しているが、一方濫用を戒めている

本校生徒心得第九項で、ビラやポスターは、事前に届出て（原稿）指示を受けてから発表し、集会も同様の過程を経るようにと規定してあるのも、「自由」濫用の弊を防ぐためのものであることを思いおこしてほしい。

昭和四十四年十一月六日

封鎖に至るまでの経過

九月下旬
『いわゆる〝処分問題〟起る』
※ガン学会抗議デモに授業放棄、無届で参加。

※中央高校文化祭で討論集会を強要。
右の行為に参加した一年生2名、二年生3名に対して保護者も呼んで校長より指導注意（一部生徒拒否する）

十月十三日
『指導注意を受けた生徒主催の討論集会開かる』
生徒約一〇〇名、職員約三〇名参加。学校側は、「処分」ではなく指導したことの説明と、政治活動に関する学校側の統一見解を示すことを約す。

十月二十一日
国際反戦デー
『前届で無届集会、校内デモ』（部外者初参加）
〝学校関係者以外の立入禁止〟の看板を破棄し、無届の討論集会を開く。部外の高校生、反戦教師の会現れ玄関前でデモ。全職員制止

十月二十四日
『全校集会要求の集会が一部生徒の主催で開かれる』
〝表現の自由〟と〝政治活動〟を論題に全校集会を求める署名運動始める。この一部生徒は、学校側の態度を不満とする（十月二十一日の事件に対する学校側の態度に関し）有志グループである。

十月二十一～二十四日
無届けのビラ配布活発。

十月三十日
いわゆる「有志グループ」なる生徒の活動で、全校集会開催の署名四八六名の署名が集められる。学校側も機が熟したものと認め開催を検討。

十一月四～七日
『全校集会開催準備』のための話し合いが、有志の会の生徒と職員との間で進められる。

四日　有志、生徒会幹部、職員間で話し合い。

六日　集会日について有志側は十一日、職員側は十二日を示して折合いがつかず紛糾。
学校側「統一見解」（別掲載）発表。

七日　有志側は次の三項目の回答を求める。
(1)全校集会までは政治活動をしても処分しない。
(2)集会で政治活動についての「統一見解」変更の可能性を残せ。
(3)全校集会開催準備会の職員は誠意のなさを自己批判せよ。
学校側としては右の三項目はいずれも認められぬ旨回答。集会開催の日時については再度準備委員会で検討して欲しい旨回答
有志生徒は、統一見解が変え得るものでない限り全校集会は無意味である。従って準備委員会の意味はないとして退席し、空中分解した形となる。
午後、5限終了後、無届けの校内放送と、抗議集会を開く。
夜、有志代表から次の2点について申し入れ。
(1)十一月八日（土）一限から集会を持って欲しい。
(2)事実経過の説明と、明八日、全校集会を持つ呼びかけを印刷したビラの配布を許可して欲しい。
学校側としては
(1)(1)については、すでに計画が決っており集会は開けない。
(2)無届け集会をした同一人が集会を求めることの道義的責任を問う意味で許可できない。
また全校集会については『来週のできるだけ早い機会に職員会議を開き、改めて検討する』と回答
以上で封鎖前の生徒との接触に終止符。

十一月八日（土）未明　封鎖

封鎖の行なわれた日時

11月8日（土）
0時5分　教頭、宿直員雑談。
0時10分　宿直員室消燈。
0時13分　ヘルメット覆面姿の三人の男警備員を詰所から連れ出す。その際よろけるふりで、非常ベルを押す。廊下にはヘルメット覆面の侵入者30～40名。警備員を用務員室に軟禁。
古沢教頭、渡辺教諭非常ベルにとび起き、着衣。教務室のドアを破る音。ガラスの破れる音騒然。教頭、校長宅へ電話。
0時15分　渡辺教諭廊下に出て退去を呼びかけるが、即座に用務員室に軟禁される。古沢教頭二、三の先生に連絡中電話不通となる。
教頭から電話を受けた校長は学校へ。宿直者の安否が気づかわれたが校舎内に入れず。校舎1、2階点燈、破壊の音。各室に人影多く百名を越える人数かと思われる。
0時30分　校長、公舎にもどり職員非常召集。
野呂教諭生徒昇降口から校舎内に入り、軟禁計四名となる。
0時50分　校長110番に電話、警察の出動を要請。
1時30分　封鎖作業終った気配で4名の軟禁を解く。四名直ちに校長公舎に行き、封鎖の概況報告。
3時40分　機動隊到着。校長、機動隊長が退去を呼びかける。呼びかけに応じ6名が校舎から現われ補導される。本校生徒1名確認。

封鎖解除とその後の経過

4時　機動隊校舎に入り作業開始。現場検証。職員図書館で対策協議。
7時頃　現場検証終了を待って職員復旧作業開始。
9時頃　登校した生徒を体育館に集め、校長から経過説明。学校のとるべき態度、生徒の自重を要望。終ってホームルーム。
11時頃　一部生徒の要望により全校集会を開き、封鎖事件について話し合う
集会終了、生徒復旧作業、清掃後下校。
11月9日（日）
13時～21時　職員会議。
11月10日（月）
普通授業6限まで、7限ホームルーム討議。
11月11日（火）
10時～12時　PTA常任委員会、同窓会幹事会合同会議。
11月12日（水）
13時30分～16時　全校集会
議題
1「統一見解」について
2　バリケード封鎖について
3　機動隊導入について
集会は平隠のうちにすめられ、健全中正な意見が大勢を占めた。

封鎖状況

本館一階のすべてを机、椅子、ロッカーで封鎖。本館二階教室の教卓、机、椅子すべて封鎖に使われる。化学薬品室の錠が破壊され薬品戸棚にあった塩素酸カリウムの瓶五本が出されていた。

押収品

ヘルメット	42個	角棒	9本
鉄パイプ	1本	手袋	26双
ハンマー	4本	タオル	31本
針金	1巻	割箸	43本
食パン	26個		
点火用ガソリン付綿棒	4本		

われわれは批判する

政治批判の真の実力をつけよ

39回　福山　健
新硫運送専務取締役

一、封　鎖

私は十一月九日の新聞でこれを知ったとき「やはり県高をねらったな、母校在校生のため早く火を消さねばならぬが…」と感じた。十一日にPTAと同窓会の合流した対策会があり、十二日に全校集会が開かれ、翌十三日に学校側より前日の集会の経過が我々関係者に報告された。

私が心配していた様な全校集会ではなかった。よかった。ホッとした。あの教務室の正視に耐えぬ暴行を実際に見た在校生諸君が、「学校封鎖」というものの実体を自分の学舎に体験したことは一時の混乱はあったが、むしろ早く火をつけられたおかげで鎮火も早かった。またダラダラしている新大の学校当局にくらべ県高の渡辺校長はじめ学校側の対封鎖処置は断固として職務者の使命を果したと云えよう。

在校生諸君、君たちは大切な時期だ。特訓されて踊らされている少数の仲間にまどわされず、政治批判の真の実力をつけるべく在校中は勉強してくれ。その大切な学校を破壊し「封鎖」して何うするというのか。

二、統一見解

本文の主旨の通り全く同感。激しい競争を越えて県高に入学した後輩諸君はよくこの主旨を体し、自重し、正視し、熟考して自分の行動に責任を持ってくれ。

高校生諸君、あまりにも自由にまた物資に溢れたこの日本の現在に朝夕上級校入試の準備に追われている君たちの苦しみが全く分らないではないが、君たちは将来に伸びねばならぬ年令だ。その大切な時期に、自分の学校をたたきこわし、授業を不可能にして何が残るというのか。こんな手段で若い感じ易い世代を混乱に引きずりこみ、暴行破壊を指揮している連中にいつまでも制圧の手が下せなかった政府与党はこの面では全く無責任であり腰抜けだった。「大学生」は手拭で自分の顔をかくして暴れ廻り騒いでいても卒業すれば就職出来る有難い産業日本だが、高校生は大切な生育の時期だ。政府も、学校側も、同窓先輩も、親たちも高校生を護れ。

日本「紅衛兵」とならぬ様に。

三、参加者の処分

今回の件で本校生三名が参加し目下自宅で反省期間を与えられ、担当教師がこれを教導していると聞く。本人は特訓された不運な生徒だが、あれだけの騒ぎを起したその責任を自分自身どう考えているだろうか。また県高に暴れこんで他校をたたきこわして行ったどこかの高校生はどんな処分を受けたのだろうか。他校ならば何をしてもよいというのか。職場には就業規則があるように、学校にも内規があるはず。処分は学校当局に一任したい。ただし私自身が本人であれば、自ら県高を去って我が道を拓いてゆきたい。

第1教務室、南窓がわ

真の教育の革命・改革をこそ

47回　風間　勲
風間印刷代表取締役

私は封鎖事件当時N紙が特集した「君等の高校封鎖を私はこう思った…」に投稿した。「君等の封鎖の情熱を知恵と忍耐に変えよ」と。

これは学校側の統一見解の中にある〝バランスのとれた知的活動〟を充分考えてもらいたいということを戒め、〝一般の社会秩序を安易に否定し破壊するはた迷惑〟を無視されることに、現象として反省を求め怒りを覚えるということは当然であるという意味である。

しかし一方そうした現象の底にある現在の教育（高校、大学を問わず）の在り方、又教育というものに直接取組む教師の、教育に対する信念と情熱というものに感じる不満や物足りない思いに対しては、私は充分な同感と共鳴を覚える。

教師に対し、教育制度改革への理性と勇気、教育に対する真剣な研究や努力の全きを求めることはともすれば血気にはやり勝ちになる若人の一途な情熱を適切に抑制する事と同様、決して容易なことでないことは充分承知しては居るが、希望的には双方がこうした点で「脚下照顧」する事が何よりも先に為すべき「第一歩」ではなかろうかと思う。

次に私は原則的に「学生の政治活動」を否定したい。

為されるべき改革に若い力と勇気を必要とすることは間違った考えではない。唯、本当にそれだけの信念の裏づけとなる「理性と知性」に対する自信のある行動—付和雷同や面白半分、又は単なる若さから来るウップン晴らし的なものではない行動—でなければならないという事は、若いから学生だからといって大目に見られるべき事ではないのだ。苦悩と懊悩、反省と謙虚、そして如何なる現象や苦しみに遭っても尚揺らぐ事のない信念、そうしたものが時間をかけて作り上げて行くのが本当の革命であり改革である。そして、行動と共にそれを実践する以前に、在るべき変革の真の姿を究明する為の追求が、学業と学生生活を通して為されなければならない余地が、君達にはまだ極めて多分に残されているのではないだろうか。

封鎖に参加した生徒諸君！「謹慎」によって自らの考えと信念が「それでも地球は廻る!!」と微動だにもしなかったコペルニクスのそれと同様なものであるかどうか…君等自らが敢えて自らに課する試練として素直に服すべき処分であると思うが如何!?

甘ったれを戒める統一見解を支持

50回　上村光司
新潟デザインセンター

一、第一印象は「とうとう起こったか」というところ。そこに至る動きには当時全く不案内だったけれど。

封鎖は認めがたい。思い上がりもはなはだしい。アピールのための一手段だとしたら、別にもっと論理的で有効な手段がある。同時に、封鎖は校舎・施設の荒廃をまねく。ボロは着てても心は錦なんて歌があるが、そのボロとは粗服のことで、カギ裂きをそのままにした破れた服のことではあるまい。

荒廃した校舎に人は育たない。校舎・施設は単なる形骸でない。まして現代の教育は豊かな施設がなければ、目的を達しえない。

封鎖を早急に解除したこと自体は、適切な処置だと思う。モタモタしていたら副作用の方が大きくなっただろう。

二、統一見解の結論は、妥当だと考える。いまの高校生の年齢で何らかの政治意識を持たないとしたら知恵遅れだろうし、在学する以上は、学校が目的とする機能をそこなわないための規定を守ることも当然である。

その規定は〝法三章〟的なものですむことこそ望ましい。しかしそれではおさまりがつかないのが現状だとすれば、例は悪いが会社の就業規則ぐらいの具体的な規定を設けたらどうか。それは学校責任者の責任において作る（責任と専断とは違う）。このごろは「犬がクシャミをすると水爆が落ちる」的な、極限ばかりを強調する議論が多いが、これは困ったものである。また永久不変の規定なんかあるはずもないから、五年たったら再検討するぐらいの気持ちでまとめたらどうだろう。

詳細な規定で律しられるのをいさぎよしとしないなら〝法三章〟でいける状況を自らつくり出していただきたい。つくり出せるはずである。

三、処分は当然である。アウト・ローの行為が、どういう状況に身をさらすことなのかを、きびしく認識させるべきである。（量刑については、いまのところ知識不十分）

現在のアウト・ローが、いつの日にかローにとって代わるかどうかは知らない。しかし社会を組み立ててゆく〝根本のもの〟が変わるだろうか。自らは法に反することを誇示し、しかも他者からは、その同じ法が規定する保護条項の完全適用を要求する。そんな連中のリードする社会が長続きするはずがない。甘ったれてはいけない。

現実問題では、行為の目的の当否に劣らず、経過措置の当否が重大な要件であることを忘れないでほしい。

項目ごとに答えると以上のようになるのだが、事後に、経過報告を読んだ限りで、岡目八目的言辞を許されるならば、学校側に対しても「残念でした」といいたい点はいくつかある。そして統一見解を読んでいて思ったのは、いまの高校というのは、ややこしい年齢の若者を中途半端な区切り方でまとめたものだということ。良くも悪くも〝組織の重味〟を少年時代に身体でおぼえるためには、三歳の幅は狭すぎる。

新しい教育と話し合いの場を

61回　江口良助
江口電業社

全国的に学園封鎖事件が展開されてる時に「母校に限って…」と安易に考えもしなかった封鎖が十一月八日未明勃発したニュースを聞き少なからないおどろきであった。このような破壊的暴力的行為は絶対に許されるものではない。

彼等がおこした非常識行為の裏にどんな主義、主張、見解が流れているのであろうか。私は何もないと思う。ただ考えるに現在の高校生活を圧迫するような教育方法煽動されやすい年代等の条件環境の中に新聞、テレビ等によるマスコミにまき込まれ、確固たる意志を持たずに自分達の主張をあのような形で主張したという風にしか私は感じられない。世の中には不平不満はいかなるところにも山積している現在、一時的な衝動にあおられ、高校生という立場を忘れ暴走した事は学ぶ者としての価値が完全に失われているという以外何ものもない。言論の自由は憲法にも保障されているが暴力の自由は許されない。私はこの高度経済成長の時代に、次代を擔う若者が政治について理解を深め、追求する事は非常に大切な事であろうと思う。学校側から出された高校生の政治活動についての統一見解は誠にその通りではあるが時期的に逸した感もないではなく、これが早い時期であったら、この様な不祥事件もおこらなかったかも知れない。

人はよく現在の高校はハイ・スクールではなく灰（ハイ）・スクールであると云う言葉で表現しているのを耳にする。特に母校の場合は、大学への予備校的な傾向が非常に強いので一部の生徒がその圧迫感に耐えられず、周囲の刺激におぼれ軌道をはずれ、危険な政治活動にとけ込んで行ったという見方も否定出来ない様に思われる。

教える者と教えられる者の存在する学生生活の中には時代の流れにそった新しい教育と話し合いの場が必要であろう。これからでも決して遅くはない。発生した事実をお互に反省しながら、又理解しながら二度とあんな事件がおこらぬ様、同窓会の一員として望みたい。

自宅謹慎という封鎖に参加した生徒の学校側の処置は、教える者の立場から学ぶ者という自分の立場をゆっくり考える余裕を与え反省をうながすためにも適正なる方法であったと思う。現在の段階で未だ一人反省の色なしという事で自宅謹慎中という事であるが将来性のある若者をみすみす殺してしまう様な事なく、大いに説得し、一日も早く正常な高校生活にもどらせる様努力されん事を希望する。

高校生の政治活動には限界があるそして志士ならば

55回　そうふくたく
市会議員

なお生徒諸君は〝生徒〟という字はどういう字なのかを、辞書で確かめてほしい。それが社会の中の諸君の位置であり評価である。

新制の高校になってから、母校が大学進学一辺倒の予備校化し切った様に感じていました。こんなザマでは青陵健児の誇りも、青山同窓会そのものもどうなることやらと云う気持ちをもっていました。ところが、「考える葦」もいるし、「根性」を持っている後輩もまだいるんだなァと、「封鎖」を聞いた途端に、性来のバンカラ好みから拍手したい気持ちでした。

ところが「封鎖」そのもののやり方。やった連中の中に、たった三人が母校生で、残りの多数が外人部隊だと判った時、ガッカリしました。

「封鎖」の目的。それによって得た成果。時代の背景。問題の本質ETC　是か非かを決めるのに随分考えあぐねましたが、結論は彼等の主張は支持出来るが暴力と破壊は絶対認める事は出来ません。

高校生の政治活動については「自由」は認めるのが当然です。自分の事を振り返って見なさい。旧制の四年生五年生の頃の心意気を。「習学中」だとか「未熟」だとして生徒を「規制」しようとするのは、教育長や校長に都合が良いからです。明治維新は今の高校生と同じ年頃の連中がやったのです。但し、彼等が職業的な活動家として学業を放棄して迄やる事を認めるのではありません。高校生として「習学」する事と、両立しての事ですから限界が生ずるのは当然です。高校生という前提がある以上、学問をする場所である学校が、どういうところか充分認識しているのですから、生徒と先生で良く討議を尽して作ったルールによって、その範囲で認める可きです。「校外」に於ける活動は、個々人が国民の一人としての権利と義務に律せられる可きです。

三、高校生だからと云う「甘え」は、絶対許す必要は認めません。「教育ママ」に甘やかされた彼等が、社会もママと同じ気持ちで見て呉れると考えていたら、飛んだ了見です。「学生」は、国民平等の立場から見て、「特権者」扱いする理由も、必要もありません。「人格」を有する「人」として、やった行為は、法の下にも平等です。器物を破損したのですから、弁償は当然でしょう。学校の「必需品」である机と椅子で「封鎖」をやり、彼等の「戦術的」成果はそれなりに挙げた事でもありますし、行為の結果がどうなるかを予測出来ない人達ではないのですから、処分は「退学」が適当です。

「斯くすれば、斯くなるものとは知りながら、やむにやまれぬ大和魂」と詠んで、刑死した人もいた世間の人は、この種の人を「志士」と称し尊敬しました。改革運動には「犠牲」が付きものです。後に続く者の沢山ある事を信じ、捨て石となる位の「覚悟」と「度胸」は、三人の人達にはあったと信じますので、処遇は先生方も覚悟をしてやって下さい。

父兄の声

前頁では同窓としての意見を特集して見ましたがこの頁には、同窓であり、又、現に子弟を母校に学ばせている親としての考えを寄せて頂きました。

学校側の指導体制の確立を望む

48回　長谷川健彦
新潟硫酸総務部長

法治国において、人は凡て法を無視して生活することは許されない。法とは、国家社会の安寧と秩序を維持し、更に之を確立するものと云えよう。家庭や学校にも、それぞれ、その組織機構の安寧秩序を維持するために、多くの心得や規則がある。これら心得や規則を、自分に押しつけられたものと理解することは、まさしく誤りと云わざるを得ない。

法とは、その社会に属する人々が、積極的に守ることによって、初めて社会の秩序が保たれ、その目的を達するものと考える。

此度の封鎖及びそれまでの経過を見ると、一部生徒側において校則や心得に違反した行動が、数多く見受けられたことは、特定のイデオロギーとは関係なく、断じて許されるべきではないと考えるが反面、学校側にも、封鎖に至るまでの経過において、大いに反省を求めたい。

封鎖に対する応急措置は、当時の状況から見て、適切なものと判断するが、問題は、封鎖に至るまでの間、数多くの違法行為を確認しながら、之を放置し、適切な処置を講じなかったと見られるからである。

職員と生徒の人間関係は、これでいいのか、又、将来に向って、その関係をどの様に、もって行こうとするのか、或は学校の秩序を守り、知的探究に専念している数多くの生徒のために、何故もっと厳しい態度がとれなかったか等々この際、改めて冷静に見究める必要があるのではなかろうか。

次に、高校生の政治活動については「統一見解」にもある如く、生徒が政治的教養を高め、政治について理解を深めることは、確かに大切なことと考えるが、いやしくも、校則や生徒心得、或は公の法に違反し、学校や社会の安寧を乱すが如き行動は、一切排除しなければならない。

特定のイデオロギーという糸に結ばれ、寒空に浮遊している奴凧にも似た、一部高校生を見るたびに、彼らの陰にかくれて、その糸をあやつっている人間を、私は心からにくしむ。（私には、その卑劣な人間が、どこにいるか分らない）

高校生の政治活動について、学校側が生徒に対して自重を要望することは当然であるが、その前に法違反の生徒を生んだ背景を考えてみる必要があろう。「統一見解」にもある通り、人生において最も大切な年代にある高校教育において、大学受験を重点とする学校の指導体制が、いかに教師と生徒の人間関係を無味なものとし、更には生徒の知的探究に対する情熱を失わせ、ひいては極端なイデオロギーに走らせる要因にならないと誰が断言できよう。要は高校教育において生徒の人間形成に対する学校側の強い決意と、教養、スポーツを通じた前向きの指導体制を一日も早く確立させることを望んでやまない。

終りに、処分の件については、校則に照らし、正しいと判断される方向に勇断されんことを望む。

学校は政治活動の場ではない

49回　小林直一
白山神社宮司

教育基本法第八条の、「政治教育」に「教育上これを尊重しなければならない」とあり「政治的教養」の必要性を言っている。

確かに教育の上には「政治的教養」の養成は必要であろう。

だが、問題は「教養」という事なのである。高校生の政治的教養は、「政治」とは何かをしっかりと考え、心豊かに政治全般の在り方を身につける事であろうと思われる。然るに、今回の「封鎖」に関しては、破壊し来り、破壊し去るという所謂チンピラ的発想にのみ終始し、言えば「受験のための」「先生との会話がない」「灰色の…」という事だけなのであり、そこには「教養」の一片さえ、或は政治的発想さえも発見されない。政治的教養とは行動迄には発展し得ざるもので、若し彼等が「思想的」根拠を以って「行動」したのであれば、既に教育の基本から逸脱しているとみてもいい……。だが、中学、高校と、受験、受験で暮している高校生の心情も一面納得できる。我々が中学二年の時に読んだ「ジャン・クリストフ」の感激を今も忘れない様な、心豊かさを養う暇もない。確かに六、三、四という学校制度の在り方にも問題があろうし、又赤旗を振ってみせる教師にも問題があろう。そして更に言うならば、自由すぎる現在日本の当然現わるべき自由への反動――又それに対する教育政治の根本理念と強力な実施の欠除という点が指摘されるのではないか。日本をつくりあげて来た数々の先人の書かれた古典さえ満足に読めない生徒の多い現在、まず悠久二七〇〇年の国史を持つ「日本」という国を凝視しようと提言したい。

戦後の教育基本法に「民主的で文化的な国家を建設して、世界の平和と人類の福祉に貢献しよう」という理想の下に、教育は確立された筈である。「民主的」という意味が、たしかにデモクラチックであるならば問題はないのであるが、一五〇〇人の生徒の中の一〇〇人程度の、一割にも満たない人数の「民主主義」が、その意図がたとえ政治的教養への芽生えであったとしても、暴力により学校という公共施設を破壊した事に対して「停学」というのは、一寸甘い様だ。果して県高は、彼等が言う様な「灰色の」「受験だけの」「先生との会話のない」学校であったであろうか。寧ろその様な生徒に申しあげたいのは〝勇気を持て〟という事であり、それは学校全体が自治性を持った真の民主的な在り方になる様な方向に力をそそぐべきであり、彼等の方向発言が県高の在り方に反対ならば勇気を持って、いさぎよく学校を去るべきであろう。

学校を去れば、彼等の発言し、行動し得る「場」はいくらでもあろうからである。

〝教育の枠内〟を考えよ

52回　津野正平
新潟市役所

封鎖は志を樹て教えを乞うて進んで県高で学ぶ生徒諸君が執るべき行為ではなく容認出来ない。或る先生は「敗戦と共に、今までの一切の伝統を葬り、歴史を抹殺した。民族の根拠も無くなり、学問・教育の大本が無くなった。それが大学の暴力沙汰となって現われているのではないか」「いつの時代でも、社会秩序が無ければ困る。道徳教育は絶対必要である。教育勅語のうちの大部分の徳目は、人として当然の教えである……」と指摘されていることを深く反省してみたい。今回の封鎖は、たとえ未成年者の行為とは言え、余りにも無責任過ぎる。

学校の統一見解は、学習の態度として妥当と考える。従って、その方針は生徒が守るべき限界として確定し、万が一にも背馳するときは、個々の具体例に対して学校は校則に照し毅然たる処置を下すよう努力されることを要望する。

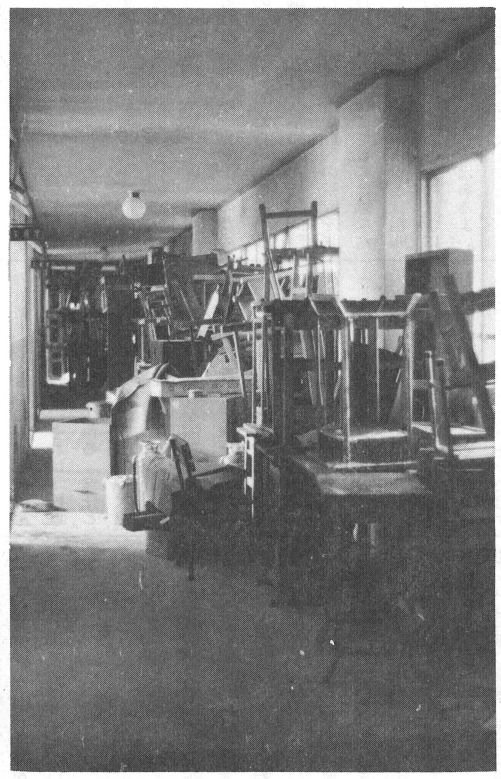
ただ、限界か否かをめぐってむつかしい事例が発生するかも知れないが、その場合、師弟ともに〝教育の枠内〟ということを忘れず、誠心誠意肚を打ち割ってあたるならば遺憾な事態を招来することはなかろうと思うし創立以来七十七星霜を経た、輝やかしい青陵健児の足跡をふりかえって〝質実剛健〟のモットーに恥じない師弟愛こそが、諸君が世界に向かって発展する原動力であろうと信ずる。

今次処分は無期限自宅謹慎であるが、いやしくも一個の人格に対して処分するのであるから無期限とは言え、次には通学許可か或いは退校か、何れかの処分をもって完了させねばなるまい。毅然たる決断が望ましい。なお、学校からの、いわば受身の処分に対して、本人の為すべきこと、或いはその保護者の為すべきこともあろうかと思われるが、どのようなものであろうか。

同窓会の行動

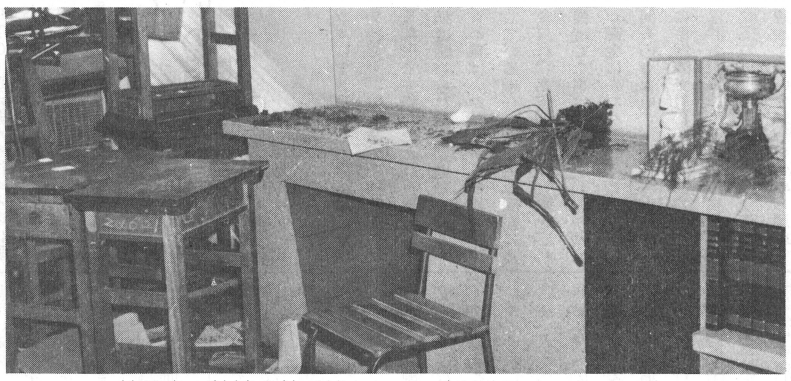
当日連絡を受けた会長、幹事長は直ちに現場を視察し以後この重大事態に対処する同窓会の態度について、常時密接に連絡協議を続けたが、学校に申し入れて十一月十一日、PTAとの合同協議会を開催、常任幹事約十名出席の上、学校側の経過報告を聴き質疑応答を重ねた。

更に十三日午後四時、古町、清水フードセンターに於て役員会を召集（約二十名出席）学校側の出席を求め協議を重ねた結果、席上論議された諸点について、正式に文書を以て学校へ申達することになり、斉藤幹事長の手許で起草、十五日渡辺校長に手交した。



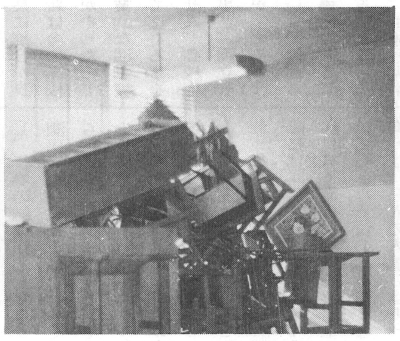
事務室・応接室前廊下
校長室前より階段まで封鎖されていた

第1教務室　机・椅子を積みあげたあと、書籍・書類が散散乱している

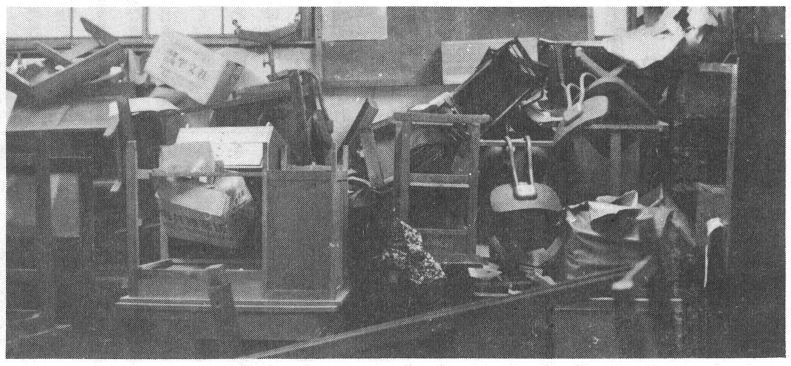


校長室　鉢植の鉢が抜かれて、床は土にまみれていた

事務室　左上が受付窓口、机・椅子は持ち出されてなくなっており、電話交換台が破壊され、右の黒いロッカーもさかさまに倒されている。



校長室、南窓がわ



第1教務室　南窓がわ、東寄り

在校生の声

封鎖は認められない 統一見解には具体性を

一年 A 生

私は、封鎖について確固たる意見を持てないできた。というのは封鎖に至るまでの経過が、われわれと全く遊離したものであり、封鎖という事態があまりに唐突で、我々もやや冷静さを欠き、全学集会の経過説明においても、学校側と一部生徒の主張にくい違いがあったためである。

しかし、時がたって客観的にその問題を見ることができるようになっても、彼らが学校を封鎖したことはまちがっている、ということだけは言える。私は革命の論理といったようなものは知らないが暴力は最後の瞬間まで行使してはいけないものだと思う。それなのに彼らはいとも簡単に封鎖してしまった。封鎖の前の日まで、生徒側の要求する全学集会を開くか開かないかについていろいろもめてついに生徒側の要求が通らなかったわけであるが、それが彼らを封鎖に至らしめた理由であったのだろうか。私はそうではないと思う。

この封鎖は前から計画されていたものだと思う。短時間のうちにバリケードし終ったことからもわかる。彼らの背後には指導者がいてそれにそそのかされてやったのではないか。また、彼らの主張する中には安保やベトナム問題もあったようだが、そのために学校を封鎖するのは明らかに間違っている。彼らの封鎖は非ばかりで、全く弁護する余地もない。

しかし、学校側や我々一般生徒に問題がないわけではない。学校の出した統一見解は先生方のおかれた立場を考えると、あれでもしかたがなかったかもしれないが、合法的なデモならやってもよいとか、もっと具体的な基準を設けてほしかった。学校側は生徒の要求にもかかわらず、全学集会は説明会の形でしか行なわないと最後まで主張したが、この生徒の要求を入れることはできなかったのか。

一般生徒の無関心、これは表面には表われないが、非常に重要な問題である。私自身も封鎖の前までは、何が行なわれてるのか知らなかったし、知ろうともしなかった。もっと我々が関心を持ち、それを表していたなら、封鎖も避けられただろう。

封鎖した生徒は処分をうけたがそれは当然だと思う。今では学校も平静さをとり戻したが、問題はこれで終ったわけではないのだ。

机・椅子が持ち出されたあとの2年1組教室、2階東端

あの封鎖は何をもたらしたか

二年 A 生

封鎖から一ケ月半もたち、大部分の生徒はもう忘れてしまっただろう。封鎖後の三日間で封鎖の話題に飽きたようである。封鎖の大義名分は政治活動に関する問題を一般生徒に、いつも持っていてもらうことにもあったはずで、その意味では今回の封鎖は結果的に三日間の効果しか持たなかったと思う。でもぼくは先生と生徒の間に激しい敵対心のようなものができそれがせつなく感じられたので元に戻ってほっとしている。また破壊行為に対する処分は当然である

この事を言うと、次元が低いなどという生徒があるが、自分のたいせつにしていたものを理由もなくどこかへやられてしまって腹が立つのは当然であり、これが次元が低いならば何が次元が高いのだろうと感ずるくらいである。しかし世間の大人のように、こわしたから悪いと言ってあとは何も考えずに非難ばかりしているのも危険かもしれない。ところで封鎖で問題にされたのは政治活動と教育のことであった。政治活動などよそ事と考えていた自分も、封鎖後、何かしなければならないかなと考えてみた。でもいくら考えても自分は何もする事ができない。将来何か世のためになることをしようという日和見主義が先立つのである。このごろはそれも一つの賢明な方法ではないかとさえ思っている。第一、自分は世の矛盾を感じても、地上に住んでいるものが人間である以上、しかたのないことだとあきらめてしまうのである。だから今はもっと、世のひどさをもっともっと感ずることが先のようである。また学校の統一見解は要するに先生に相談しろということであり学校という管理された団体が出すことのできるのはまあこんなところであろう。もう少し欲を言うなら学校としてはこうするという具体的なものを一つくらい出してもよかったんじゃないかということである。

次に教育問題で、受験体制が問題になっているが、先生と親密に触れあえるのは高校が最後だし、総合的な教育を受けるのも高校で最後なのだから、この二つが満足されるならどんな方法の教育でもけっこうである。先生方はこれをよく検討していただきたいと思う

以上が封鎖から一ケ月半たった今の感じである。

教師・生徒の相互理解を

二年 B 生

全国的な波及状態にある高校紛争と、その状況下で露呈した我が校の紛争は、生徒側から教育の在り方を問い、生徒の手で要求を掲げ、運動を推し進めている点で根本的に共通しているといえよう。

そこには紛争を通して生徒と先生の間における信頼感が失われつつあること、あるいは教育それ自体への疑問といったものがあくまでもつきまとっていると言わねばならない。しかしそれらにはただ単に政治的意図によるデモンストレーションやいわゆる流行語の、〝世代の断絶〟などの皮相な見方をしては、決して解決されぬものを含んでいると思うのである。

人はそのあらゆる立場で、いずれも自分が正しいと主張する。その結果、偏狭で独善に陥りやすい

しかしそれは強い個性では決してなくて、集団のなかに安心立命を求める。そういう状態では不信感どころか、お互いの立場における力と力のぶつかり合いしか生まれまい。そうではなくて先生と生徒、一人一人が教育という場において腹を割った話し合いによって信頼感を取り戻そうとする努力が必要だと思うのである。つまり一方的に相手を追求するのでもなければ一方的に自己批判に相手を追いやるのでもない。相互理解を求める積極的姿勢のもとで解決しようとしてゆく方向性が必要なのである。そこにおいては、学校側の提示した〝統一見解〟も真の意味（学校側の説明したような）をもったものになり得るのではないか

統一見解がその効果に疑問が残されている点で、この場合、統一見解は本当に内容あるものとなって来るのではなかろうかと思うわけである。

しかし全学集会ではとかく問題が横すべりし、根底からの盛り上がりを欠いていたと思えるのはもうすでに、生徒一般が無関心となってきていることを示しているようだ。それでは駄目だと思うのである。このままズルズルともとの状態にもどることは、問題の解決を妨げるばかりか第2、第3のバリ封といった状態に追いやることになろう。とにかくあらゆる機会を自分に与えて継続して問題解明に努力すること、自分の信念を見い出しそれを推し進めてゆくことが必要であろう。感情論や目先主義は混乱をもたらす。現在ほど個人の理性と良心が求められている時代はない。

高校教育を告発する

三年 A 生

僕等が告発しているのは、高校教育総体である。差別と選別のそのメカニズムの中で、三無主義に陥り、情熱なき教師に絶望し、「ただ大学へ入りさえすれば…」と大学に対して、いまだに幻想を抱き続ける多くの高校生群の中に埋没することを拒否する極めて人間的な叫びから僕等は出発しているのである。にもかかわらず教師そして何よりも多くの高校生が真に主体的に問題把握を成し得ないという現実が一方に厳として存在していたのだ。それに対して、彼等（封鎖に参加した）は、封鎖という容認さるべからざる手段に訴え、日常性を破壊することによって教師の、生徒の視点の転換を迫ったのであると思う。

封鎖の挙に出た諸君のさらけ出した高校教育の実体を自分はよしとするしかないのか。〝未熟な教え子を「政治」の修羅場に出す訳にはいかぬ〟〝政治活動は自重せよ〟と繰り返す教師。そこには明らかに政治活動を現象としてしか捉えずいつの時代においても政治と教育との間に絶えざる緊張関係があることを、そして、戦後「小学区・総合制・男女共学制」といういわゆる「高校三原則」を打ち出した〝民主教育〟がなしくずし的に、崩壊させられてきている現在、あくまでそれらの状況を隠蔽せんとする意図がありありと窺えるのだ。個人倫理のみで現在の高校教育の矛盾を克服することなどできはしないことを百も承知のはずの教師自身が、〝高校は大学の予備校化しているなどというが、そうしているのは生徒である君等自身じゃないか〟という時、すでに彼は教育者としての資格を喪失しているのであろう。一方に学問を手段化する受験体制があり、他方に、総合制を不当にも軽視した職業教育がある。両者は切り離して考えられないはずである。なぜなら、先に述べた「高校三原則」のうちの小学区制、更に総合制が崩壊する過程と前二者の確立強化とは機を一にするものだからである。

僕らは〝学ぶ〟という意味をどう捉えるべきなのか。批判精神なき〝学問〟は学問の名に価するであろうか。〝学ぶ〟とは何であるか。それにはまず進学校に学ぶ僕らの置かれた状況、それに対する僕らと教師の関わり方、まずそのようなところから検討を加えてみることが必要であろう。前にも触れたように現在の新潟高校の教育が、明らかに大学入試突破の為の手段と化していることは否めない。学問はそれ自体が目的であるとすれば、この事実は極めてうれうべきことと言わざるを得ない。

仮に高校生の中に「学問がやりたい」という純粋な動機でひたすら大学を目指して受験勉強のみに明け暮れている人間がいるとすれば、彼は明らかに自己矛盾を犯していることになる。学問とは己れの実存に関わってくるべきものであろう。時にそれは自己否定を迫るかもしれない。無知な人間は、自らの置かれた環境条件を或いはそれに関わっている自己そのものを客観的に把握し得ない。しかし学問に主体的に取り組んできた人間であるなら、そうであってはならない、あり得ないはずである。学問とはまさに自己を客観視せしめ矛盾に満ちた自己及び環境を超克する力を与えてくれるものでなければなるまい。

差別と選別の教育の中にエリートとしての将来を約束され、そこにあぐらをかき、学問を手段化するというまさに犯罪的な行為を、僕らはそして教師はやっているのだということを自己の痛みとして受け止め、この局面に如何に切り込んでいくか、その為の主体的模索こそ今僕らに、そして教師に課せられた試練である。

事務室前廊下　校長室前より

封鎖の必然性はない しかし不満はうっ積

三年 B 生

私は封鎖を含めた暴力は絶対否定すべきだと思ってた。しかし、大学紛争に関した本を読んで『彼らがそうするのも無理はない。学生の要求を拒否し、それを力で不当に弾圧する相手には最後の手段として認めざるを得ない』と、封鎖について再考した。それで今回の封鎖も、原因も経過も分からなかったが、同情的であった。しかし、冷静になってこれを見ると、新潟高に封鎖すべき原因が、切迫した必然的状況があったのだろうか、という事が疑問となった。封鎖後の討論は、感情が先走り論点がかみ合わず空転した感がある。だから、原因や背景等封鎖の実態が解明されないままうやむやのうちに正常化された。その結果、全生徒が自分自身のものとして封鎖の与えた意味や問題を受けつけなかった。それで単に一部の者の封鎖――暴挙としかならなかったのだと思う。この様な状況のもとで封鎖が繰返されても、受験校新潟高校は少しも揺るがないだろう。

政治活動について言う前に、その社会的教育的背景を考えて見ると、第一に、学校・親の高校生に対する受験優先の態度と、未熟という名目による過保護、それと自由や行動の束縛。次に、大人の都合によって、大人扱いされたり子供扱いされる高校生の不安定な位置。第三に、大学合格率によって格付けされる学校、それを認めて入学する学生、従順で受動的な学生を製造するベルトコンベアシステムのような教育体制、すべて受験優先が高校教育を歪め、現在のようにさせた。また、教育基本法による学校の政治活動に関する制約。この様な状況下で、高校生は抑圧された潜在的意識不満がうっ積して、何かを求めて大きく揺れ動いていると思う。そして、その一つの動きとしての政治活動だと思う。今迄社会は高校生を未熟だからと言って押えつけて来た。だが、現在の目隠し（過保護）の状態の高校生が未熟なのは当然だと思う。活動家学生は「未熟は未熟なりに、物を言い、行動してその結果少しでも良くなれば」と言う

社会は、もう目隠しという考えを捨て、高校生に行動に対する真の責任意識を自覚させるという事が必要だろう。

東日本中等学校 水上競技大会記

43回　今井　亮

昭和一〇年八月二五日、東日本中等学校水上競技大会（秋田市営プール）の幕は将に切られんとしていた。吾等が精鋭は

自由型　渡辺　昇一（五年）
同　佐藤貞之助（四年）
同　水野清之助（四年）
背泳　藤宮松太郎（三年）
同　梅田　悌次（五年）
主将　鈴木　英夫（五年）
平泳　上杉　恒作（四年）
同　杉崎　喬（三年）
同　沖野　準（三年）

この日盛夏とはいえ北国の秋田では既に秋風がたち、加うるに台風のため雨中の競技会となり気温一九度、水温一七度という悪コンデーションではあったが、北海道東北六県から夫々選りすぐられた若人等の熱気はプールを圧する感があった。（予選・準決勝記録省略）記録―長水路記録―

前列左より、杉崎、酒井、渡辺、梅田、佐藤
後列左より、芝間部長、藤宮、水野、上杉、今井、鈴木政栄、斉藤副部長

二〇〇米継泳決勝

背泳専門の鈴木が自由型短距離に素晴しいスプリントをもっており、練習中もコンスタントに三〇秒を割る記録を出しており彼をトップに起用し水野、藤宮、渡辺のオーダーで出場。

スタートでは小柄な鈴木は稍々遅れたが天性の強じんなビートで忽ちトップにたち、追いすがる東北勢を寄せつけず、一ストロークの差で水野へ。水野は短距離をもっとも苦手としており苦戦を予想されたが何とかその差を保って藤宮へ。三番藤宮、美事なフォームで差を拡げ一米のリードでアンカー渡辺へ。短距離には絶対の自信と随一のスプリントを誇る渡辺、物凄いダッシュで益々差を拡げ一着でゴール。

一着　新潟中　二分〇秒二（大会新記録）

二〇〇米平泳決勝

杉崎が予選で落ち、上杉、沖野の奮泳に期待するも意外にレベルの高い東北平泳勢のため当初より苦戦は予想された。県大会では好成績を挙げた上杉も水温の低さにすっかり調子が狂ったか、秋田中の巨人達のあおりを喰い、日頃の記録に及ばず。若冠沖野は家庭事情によりこの試合を最後に新学期から今戦っている秋田中へ転校が決っており、母校への最後の餞と頑張る。

四着　上杉恒作　三分一一秒二
五着　沖野　準　三分一四秒〇

四〇〇米自由型決勝

予選の記録からみて水野、藤宮の二人と秋田商相沢の争と見られていたが案の定三者平行のまま均衡を保つ。三〇〇米を過ぎる頃から互いにスパートをかけたが地元の栄誉と頑張る相沢僅かに勝り一ストロークの差で逃げこむ。

二着　藤宮　五分四二秒二
三着　水野　五分四四秒〇

一〇〇米背泳

梅田のピッチ泳法に対し鈴木の足をきかせたビート泳法と対象的な二人であるが三年生の当時から互いに琢磨して来た好敵手であると共に最も信頼されている得点源でもあった。スタート直後より全く他の追随を許さず味方同志のトップ争いとなる。両人の実力の前に流石の東北北海道の強者等も吾等の飛沫をあびる。

一着　鈴木英夫　一分二一秒六
二着　梅田悌次　一分二二秒二

一〇〇米自由型決勝

予選記録からみて六秒台の選手が渡辺を含め三人おり、烈しいデッドヒートが予想された。スタートより五〇米の折返しまでは六名の選手が殆んど一線に列んでの激突でハラハラさせる。渡辺、持前のピッチ泳法でぐいぐいとばす。ラスト二五米では予想通り秋田中斉藤、本荘中田中と渡辺の競り合いとなるも互いに譲らず三者同時にゴール。僅かタッチの差で優勝は逸したが、よく二着に喰い込む

二着　渡辺貞之助　一分六秒八

この頃より台風のため雨益々烈しく気温水温共に下り、泳ぎ終ると冷え切った身体を暖ためるため控室に炭火を持ち込む。

三〇〇米混継泳決勝

平泳と自由型に強い秋田中を最もマークし、背泳でどの位相手を引離してくるかが勝敗のポイントであり、トップの梅田に全幅の信頼を託した。

梅田最初よりとばし最後までその力をゆるめず二位秋田中に五米の差をつけ上杉にタッチ。上杉一〇〇米には自信あり。追迫る秋田中の逸材保坂にトップを与えず頑張り抜き二米の差を保ってアンカー渡辺へ。一〇〇米決勝での優勝者秋田中斉藤が必死の追泳を見せるも差は縮まらずゴール。

一着　新潟中　四分六秒二（大会新記録）

二〇〇米自由型決勝

好調同志の水野、藤宮を送る。一〇〇米の優勝者秋田中斉藤を中に挟んで三者頭を列らべて競い合う。県大会で藤宮がこの種目優勝しており二〇〇米では自信あり優勝期待も充分であったが地元勢も流石に強く、僅差で一着を譲るも二、三位を占める。

二着　藤宮松太郎二分三五秒七
三着　水野清之助二分三六秒六

八〇〇米自由型

佐藤の単独出場。この遠征の出発前から首のはれものが悪化して出場を危れていた彼であり、とても泳げる状態ではなかったが化膿した疵口に水が入らぬよう綾重にも絆創膏をはって力泳する。八〇〇米の長帳場、しかも最悪のコンデーションの中を、プールサイドの選手等も心配そうに見守る中を最後まで頑張り通す。

五着　佐藤貞之助　一二分一三秒四

二〇〇米背泳決勝

勝敗の帰趨は既に当初から判っていた。鈴木か梅田か何れかの問題である。練習中は二〇〇米は鈴木、一〇〇米は梅田が強かったがこの大会での結果は逆で一〇〇米では鈴木が優勝、二〇〇米は梅田と仲良く分けあった。

一着　梅田悌次　二分五八秒〇
二着　鈴木英夫　二分五九秒九

一〇〇米平泳決勝

二〇〇米の雪辱を上杉、杉崎頑張る。上杉三位入賞を目指し頑張り、杉崎緒戦乍ら奮闘、よく五位に喰込む。

三着　上杉恒作　一分二六秒〇
五着　杉崎　喬　一分二八秒〇

八〇〇米継泳

大会最後の大詰、掉尾を飾る八〇〇米継泳決勝である。佐藤の首の疵口の悪化益々ひどく、懸念されるも代えるに人材なく予定通り泳いで貰う。トップ佐藤から水野藤宮、渡辺のオーダーを組む。

トップ佐藤、病をおしての力泳乍ら矢張り無理であった。懸命なる力泳にも拘らず、大きなハンデーとなって実力を出し切れず先頭との差約八米五位で二番水野に引継ぐ。水野、その差を縮めんと引継ぎ直後より懸命にとばす。五〇米の折返し点で一人抜き一〇〇米では更にもう一人抜いて三位にあがる。トップとの差四米に迫る。敵も懸命な力泳だが差は次第に縮る。

ついに二位をも抜いてトップを追う。満場総立ち、騒然たる中を遂にトップと並んで、三番泳者藤宮へ。水野の力泳に応え藤宮もスタートよりぐいぐいとばす。五〇米折返し点で、二位に早くも身体一つ水を開け、その後、差は益々拡がる。遂に八米も引離してアンカー渡辺へ。渡辺にとって学生生活最後の力泳である。苦手の二〇〇米であるが、優勝を目前に力泳又力泳。敵も追すがるも差は縮らずゴール。

一着　新潟中　一〇分四〇秒二（大会新記録）

遂に優勝成る。各校には夫々秀いでた選手もいたが各種目にむらなく得点し選手層の厚さ充実という点では本校が最もすぐれており継泳三種目の優勝が如実に証明している。

苦節一〇年といったら大げさかも知れないが本校水泳部が創始されて以来の快挙であった。神伝流の古泳法時代から遠泳の時代を経て大正中期より競泳時代に入ってからも単発的ではあったが、北村博繁、五十嵐力英、白倉弘二、河内恭三氏らの幾多の名選手が輩出していったが、それ等選手達の悩みは練習場（プール）をもたないということであった。練習場を求めて、海に、臨港の水溜りに、信濃川や堀割に、転々と練習して来た先輩達にとって、プール建設ということは次代から次代へと伝えられ、既に希望というより執念となっていた。

昭和八年七月、故竹山九朗氏を始め、山添三郎、伊藤禎一郎氏らその他数々の諸先輩の努力で現プールが完成。プールが完成すると先輩等は連日プールサイドに押寄せた。そして己等の果し得なかった夢を後輩に託すべく、叱咤激励シボリにシボラレル毎日が続いた

吾々現役は、それが当然のこととして受止め、文句もなく反撥も感じなかった。ただ黙々として泳ぎ続けた。先輩等はそれでも物足りなさを感じ、乏しい金を出し合い、当時のオリンピック選手播蘭の地、静岡へ合宿させる等、選手の強化に狂奔した。

その成果がこの大会に結実したことは言うまでもない。

プール完成後三年目でこの快挙をなし遂げたことは、何よりも先ずプールを贈ってくれた先輩達に対して報いたことでもあったろう

先輩から後輩へと受け継がれた伝統は今も尚引継がれ、日本海の怒涛に挑んだ昔から現在のプールまで夫々の思い出は異るかも知れないが、水に対しては老若問わず一つになる。

付記

翌昭和一一年の同大会は、大量の卒業生を送りだし、戦力低下を来し、優勝は危れたが、椿一郎、高島良郎、松本進等の台頭により前回に引続き再制覇を成し遂げたことを付記する。

青陵飲食街（五）〝酒蔵 金剛〟

県都に夕闇迫る頃、表玄関新潟駅は急にあわただしくなる。駅前繁華街も活気を増してくる。ひときわ渋味のあるネオン「酒蔵金剛」が駅前花園町に燈るのもこの頃である。家族連れ、アベック、サラリーマンなど中流以上の新潟人が吸い込まれるようにのれんをくぐる。「金剛」は毎夕にぎやかな歌声に満ちるのである。

新潟駅前になごやかなムードをかもし出すこの店の主は、他ならぬわが青陵健児、原田衛氏（六八回生）である。

昭和四十一年、まだものさみしいこの駅前の一角に原田氏が、亀田の銘酒「金剛」酒造直飲所を兼ねて開店したのが「酒蔵金剛」であった。

本校在学中、剣道、空手と武士道のすたれつつある風潮に活を入れながら学習に励み、やがて名門中央大学法学部に進学した原田氏は、弁護士の志を捨て、やはり武芸柔道でならした実父、原田宏（四三回生。昭和十九年ビルマで戦死）の跡を継ぐべく帰郷したのである。

その彼には、大学生時代、北海道の雪の中での熱い恋の後結ばれた現在の奥さんがあり、がっちり組んだ二人は、未知の世界での素人経営のスタートをきったのである。

「金剛」の看板料理フグ鍋にまつわるこんなエピソードが伝わっている。さがして入った東京のあるフグ専門卸店の主人は、原田氏の真剣な商売意識と、その人物を見ぬいて信頼。翌日早速東京からフグを卸してくれたのである。古武士的人物原田氏の持つ一面を語るに充分である。

「酒蔵金剛」本店、（駅前花園町TEL(44)〇九八一）を御案内しよう

一階は和風・洋風兼備のくつろいだ雰囲気。昼間は食事専門の店である。

二階は八十名を収容する宴会場の大座敷。昼間は学生の懇親会場に開放できる。

料理
フグ…各種料理、フグチリ四〇〇円
ウナギ…浜松直輸入、ウナドン二五〇円
テンプラ…油とネタは天下一品
サシミ…新鮮なネタが売物
酒…銘酒「金剛」二級七〇円
従業員
約二十名。殆んどがピチピチした若い女性。健康美に満ち、迅速なサービスぶりは他に例をみないほど。

にがみばしった好青年、金剛社長原田氏から将来への抱負を聞き出した。

「安くて、気軽にお酒と割烹料理を楽しめる店を東新潟にも、それを目先の目標にして現在の店をより充実しながら努力を続けるつもりです。」腹の底に力のある言葉でした。

支店「金剛」古町四新川小路
TEL(28)九五七三

新潟日活をやや上った新川小路の「金剛酒蔵センター」跡に四十四年開店。

しんみりとした雰囲気。
郷土料理を楽しむ店。
定員約二十名

万代橋をまたにかけ、東西にくつろいだ雰囲気、粋な鍋料理、大衆の店を新潟人に楽しんでもらおうと、わが同窓生原田衛氏は落着いた物腰のうちにも野心を燃やして張切っています。青陵健児諸紳士の御支援を願うや切。

（上杉記）

ハバロフスク市を訪れて

40回　本間　章
新潟市建設局長

新潟市とハバロフスク市とは御承知の通り姉妹都市として昭和四十年より親善関係を強めており、使節の交換を続けているが、今年度は不肖私が団長を拝命し、建設関係使節として、七月十五日正午一行五名で新潟港発のソ連船トルクメニヤ号で、一般観光団と共に広場が一杯になる位の大勢の人々に送られて鹿島立ちをした。併せて一九五名の乗船客であった。

普通日本からソ連経由で欧米方面に旅行する場合、船でナホトカに上陸し、汽車でハバロフスク市に向い、ここから汽車又は航空機でウラルを越えるので、日本人は今年七万人以上がハバロフスクを経由するだろうと言われている。之に要する旅費が約十五億円にも及び殆ど大部分がソ連側の収入となっている。

昨年までは新潟ナホトカ間には旅客の定期航路が開かれていたが乗船客不足の為に打切りとなり、現在はナホトカ・横浜・香港ラインがあるだけで、新潟から行く場合はチャーター船による外はない。

従って乗客数によって一人当りの運賃は一定していない。時間的に云えばナホトカまで新潟からは二四時間位、横浜からは五十時間を要する。私共は往路はトルクメニヤ号、帰路はバイカル丸で横浜に上陸した。何れも五三〇〇トン位である。

旅は平隠であったが両船を比較してみるとバイカル丸の方が数段設備は良い様である。一例をあげればバイカル丸は二船室に一つの割でシャワーがあり勿論トイレも同居してる。トルクメニヤ号は数ケ所にトイレがあるだけで船室には無い。しかも殿方用のは背の低い人には届かぬ位高い位置にあり木の踏台などがあるけれど、私位の背たけでやっと間に合う位である。小さな人には犬が電柱にあれする様な格好になる。シャワーはどこにあるのか下船するまで使用しなかった。

船内のバー

船内のバーには一寸間に合う位のものが揃っている。日本酒もビールもあった。ジョニ黒など一本二八〇〇円程度でソ連製のユニヤックはまだ大量に日本には入ってない様だが素晴らしいものに思えた。言葉は通じなくとも現物が目の前にあるので、指先一本で事は足りる。懐の関係で見当をつけながら飲んではいるが、ドルでも日本円でも払うと時間はかかるがちゃんと出したもので釣はくれる。

煙草もソ連製（日本人には一寸強くて口に合わないかも知れない）や一部外国製のものもありチョコレートなどと机の上に並べてある。

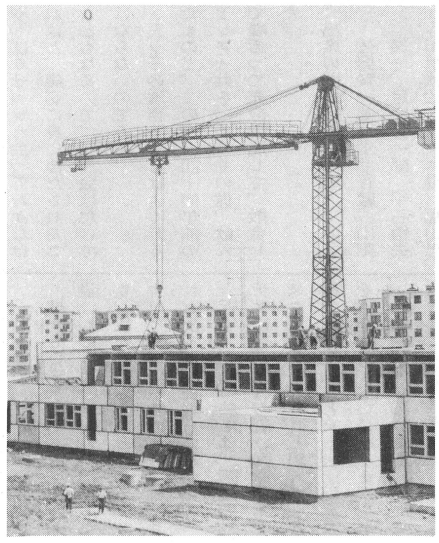
トルクメニヤのママさんはジーナと言った五十才位の愛想の良い婦人で二十二才になる男の子が居るとか。主人は他の船で働いている。又何か探していたがバケツを見せて之は乗船前に本町の市場で買ってきたんだなんて事をにこにこ話をしていた。外国で聞く片言の日本語は何かなつかしい感じがする。思わず飲み過す所であった。

バイカル丸は香港行のためか日本語を全然知らない中年のママさんと若い娘さんの二人で娘さんは船の事務員の兼務の様にも思われた。従って名前も何もわからない。

唯にこにこしているだけだったが飲む方には支障が無い。船客は外人客の方が多く人種も雑多であった。船中は暑かったせいもあるが外国の青年の大半は上半身裸で往来していた。バーや食堂には流石に裸の客は無かったが、バーを利用する客は案外少い様であった。

旅行中忙しくて土産用の酒など買い損ったら帰りに船のバーで買えば良い様だ。円でも弗でも買えてその上高い事は無い。

ナホトカにて



プレハブ住宅建設現場

暫らくぼんやりしているとノックの音に続いて中年の婦人が顔を出した。荷物の運搬にでも来たのかと思って手を横に振ったらニヤッとして行ってしまった。植物検査官だったらしい。該当物は何も無いので良かったが、書類不備かと暫く心配したものだ。

下船するとハバロフスク市よりモスクビッチン氏（市の秘書室長）とオゴロドニコフ氏（通訳で放送局勤務。昨年新潟市を訪れた人で顔なじみ）が迎えに来てくれていた。

発車まで相当時間があるのでマイクロで市内見物をする。先ず駅で一部ルーブルに換金したが、団体客と別行動だったので簡単に済んだが計算が慎重の為か時間は早い。海と川の違いである。船も相当入っており日本船も諸所に見受けられた。木材積出が主体であるけれど。

直ぐに気がつくが、既に、能力は限界に達している。新潟に東港を新設する様に他に新港を増設しなければならない。之の為に私共の船と前後し横浜港発の船（一日前の一四日に出港）で我国港湾の権威天埜良吉博士が前の一建局長板尾純一氏以下の技術陣を引き連れて上陸する事になっていた。正式の技術顧問として招かれたものである。残念乍ら会えなかったが数年前までは、あらゆる場合に日本からの協力申入れについて戦敗国の分際でと全く寄せつけない態度で拒否し続けられていたものである。新潟地震の取持つ縁と云うか、新潟市はソ連で大きくクローズアップされて来たのである。地震後新潟市を訪れたソ連要路の人は多い。異句同音に復旧は不可能に近いと思い込んでいたらしい。中にはハバロフスク市の党第一書記も含まれていたらしい。震後ソ連よりの材木運搬の第一船で来た人である。三年許りの間に殆ど回復してしまった。私も個人的には当時他県に勤務していたが復興の速度には敬意を表していたものである。ソ連側は日本の技術を再認識正当評価したものと思われる。

だが自動車の方はフランス、イタリーに夫々技術協力を求めている様である。

ウラジオストック港は戦前良く名前をきいていたが、之がナホトカ港と改名したものだと思っていたが、全然別の港であり、ソ連語では掘り出し物とかの意味だそうである。舞鶴市と姉妹都市の関係にあるそうである。

ウラジオストック港は軍事上の意味もある様で外国船は一切入港させていない。

ナホトカに日本人墓地のある事は全然知らなかった。ハバロフスク市のよりも一段規模の大きなものであった。地上に高さ二〇巾一〇（単位は何れもセンチメートル）の枠で囲まれた全体的には六〇に一五〇位のもので中は土砂で埋められ、整頓されて並んでいる。一部剝離してるのもあったがネームカードもついている。今年は寒さが酷しく遅くまで続いたので花の出来は悪いとの事で、その上草は奇麗に刈り取られていたのでその際切ったのかも知れない。草花は殆ど目に入らなかった。維持は良くされてる様で、番人らしいのが入口の扉の外に三名程居たが勿論話は全然通じなかった。日本から運んでいったものだろう、木製の供養柱や石燈籠などもあった。

物凄く大きな蟻が大陸的に沢山動いていた。ソ連の葬式は殆んど土葬なのだそうである。

極東開発の方針が決定したらしくて、市内では各所に住宅建設が盛に行われていた。全国的に規格化されているらしく、五階建てのプレハブ住宅である。計画が決定するとそこに何があっても構わない。古い家は取壊わし山や丘は削り、低地は埋め、樹木は抜いてしまって、森林は切り開く有様である。切り取った所や盛土した場所に特に丈夫な土留め工事をするわけでも無く、基礎調査もしているとは云ってはいるが杭打ちもせず度胸良く施工している様に思われる。その反面必要なだけ森や林を切り開くので緑地は充分にある。緑地面積は六六パーセント位と云われている。

面白い事には、埋立て中に金砿が発見されたと云う。埋蔵量は勿論言わないが之だけは計画変更するのでは無いかと言っていた。国が広いのでどこから何が出てくるかわからない。

尚ナホトカには日本の領事館があり最近着任されたばかりの片山領事に挨拶のため訪問したが殆ど毎日駅と港に出かける方が忙しいとの話であった。それ程日本人のソ連旅行は多くなっている様だ。今知事会一行を送って天埜博士一行を迎えに行くのだそうだ。

新潟市とも関係のある進展実業と云う古い貿易会社もあるそうだが之は時間の関係で訪問しなかった。

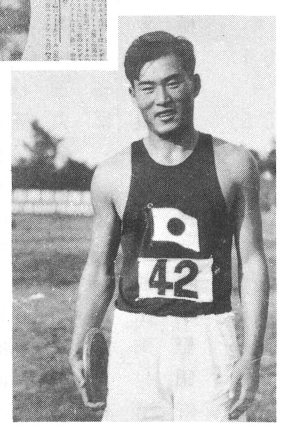
以下次号

斉藤真衛君の思い出

35回　小山久一
小甚㈱代表

昭和四年十月開かれた日独対抗陸上競技大会円盤投に於て斉藤真衛選手（慶大、新潟中学出身）の一擲は七万の大観衆片づを呑む中に秋空高く弧を描いて四二・〇五Mの記録を以て堂々優勝した。因みにこの記録は早大の沖田君の保持して居た四一・二二Mを破った日本新記録であり全六年二月僚友板橋君の出した四三・一七Mによって書き改められる迄破られなかった快記録であった。当時の新聞を拾い読みして見ると、昭和四年十月六日、神宮外苑競技場に於て秩父宮両殿下、賀陽総裁宮、〇〇宮、〇〇宮等十五宮殿下を初め奉り……日独外交界の大官名士を網羅して……七万の大観衆、万雷の拍手を浴びて…等々、又、織田幹夫、南部忠平選手等の懐かしい当時の活躍記事が散見される。中にも真衛君は数少ない種目優勝者、日本新記録樹立者として最大級の取あつかいを受けて居る。

当時の新聞



グランドの斉藤君

銀座、有楽町は勿論デパートのショーウインドには彼の特大写真が掲げられ「陸の王者」としての勇姿は未だにマブタに焼きついて居る。

中学一年の時から全校一のズバ抜けて大きな体軀ではあったが大学二年にしてこれ程の大選手になろうとは想像もして居なかった。時折り三田の山上（当時予科も三田にあった）で逍遥する六尺豊かな彼と出遇って立話しするぼくの方で仲間に見せてやり度い様な誇らしさを感ずるのだったが彼は一向に気負った風な感じを見せなかった。大体彼はこの様な人柄で兎角調子に乗り易いぼく達には一見もどかしく思わせもしたが後に大慶応の陸上の主将として大部隊をよく統率していった寡黙の中にも沈着を失なわない人格、手腕の持主であった。

卒業して直ちに第四銀行に入社爾来三十数年間その大部分を本店枢要なポストを歴任。持ち前の重厚な人がらを以って社内外の信望を集め常務営業部長として今後の活躍を惜しまれ乍ら不幸にもガン系宿あの為残暑も去りやまぬ去る八月末、五十九年の生涯を終ったのであった。

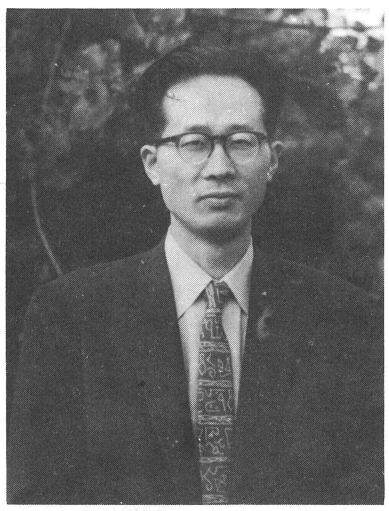
一時期栃尾の支店長に出た事があった。或る時ぼくの同市の知人某に会った際「斉藤真衛さんは立派な人ですね」と云う処から段々事情を聞いて見ると、中学時代、競技部にも居た事のあるKが栃尾に現われ支店長の親友といいふらし軒並み料理屋で女をあげて居続けの豪遊した揚句果てはその筋に突き出される処迄いった。勿論真衛君には関係ない事なのだが、小さな町での事もあり、料理屋街でのこの様な問題で自分の名前が使われるなど銀行の体面信用にも係わる事として少なからぬ額ではあったが自腹を切って済ませた。言い訳をすれば無関係で通せるものなのだがそこが真衛君らしい立派なところで、後で町中の同情、信用を一層深めたと云うのである。後日彼に会った際、その話をしたら流石の彼も「イヤー、あの時はKには閉口したよ」と笑って居った。

この文を書く為、旧ろう、奥さんを訪ねた際、一寸この話をしたが知って居られなかった様な様子だった。普通こんな場合、女房にくどいたりしやすく、話をすればしたで大低大反対を喰らい、引いては家庭の悶着にも発展するものである。如何にも真衛君らしい配慮だと微苦笑を禁じ得なかった。Kのその後のハレンチ生活に至っては語るにも不名誉に耐えないものであった。

忍耐、寛容と云うと何処かで盛んに聞いた言葉であるが、真衛君は洵に良く出来た人物と言う可きである。「死ぬる子はみめよし」と云う義太夫の文句を嚙みしめ乍らこの文を書いて居る。

高橋正信先生を悼む

阿部正
新潟高校教諭



高橋正信先生

先生は昭和二十年大学を卒業されると同時に本校に着任、英語、日本史を担当された。当時は食料事情等の生活条件の極端な悪化により無理がたたり病の床にたおれられた。以来幾度か闘病生活を送られたが、学校を長期休養される時も「学校に迷惑をかけて申しわけない」と何度も頭を下げ涙ぐんでおられたのだった。昨年一年間の休養も終られ元気で学校に復帰できると毎日喜んで試験勤務しておられたのに昨年九月二十九日、御家族のお心尽しの御看護のかいもなく急に病状悪化し他界された。

先生は教務、生徒会活動、図書館活動に尽瘁され、授業も熱心で生徒の信望も厚かったので、一層人生の無常をつくづくと感じさせられるわけである。

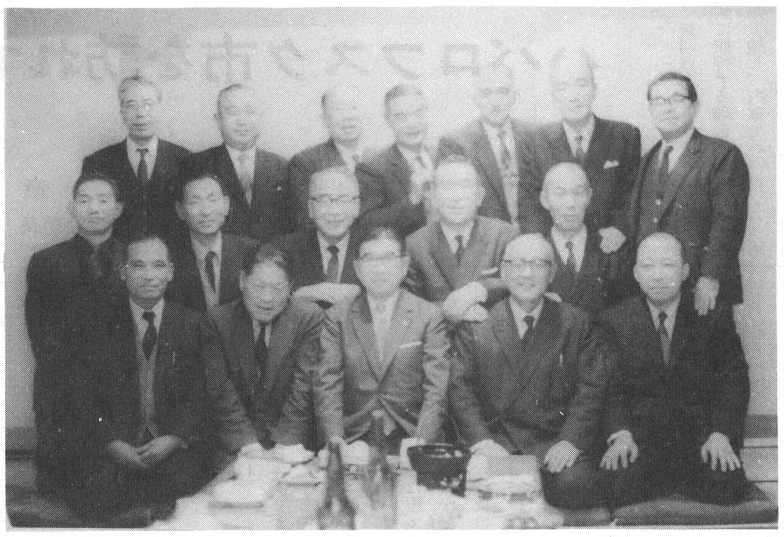
十月一日の葬儀には鍵富同窓会長、石川、阿部前校長をはじめ先生にお世話になった卒業生多数参列、自宅で涙の中にしめやかに行われた。ここに謹んで先生の御冥福を祈りたい。

事務局よりお願い

度々のことで恐れ入りますが会費未納の方は是非納入下さるようお願い致します。この会報をなるべく大ぜいの方にお届けするためにも会費納入にご協力をお願い申し上げます。

三三会 元気なり

若さを誇る33回



十二月十四日は新潟としては近年になく雪が降り積もっていて、義士の討ち入りではないが一寸気もはずんで会場の小三へ行ってみたら、年の瀬も物ともせずに皆んながよく集っていた。

どうも三三会は妙な具合に「三」の字に語呂を合わせたみたいに、近来会合も三年目毎になっているのが気になるが、お互い齢のことを考えると何十年と親んだ大事な顔が、ふと二度と見られなくなっていることを思い出したりして、やっぱりせっせと会っておかなければと、痛切に身にほだされることともなるので、三三会は怠けてはならないのである。

三ツ子の魂百までとはよく云うたもので、この夜も四十何年前のヤンチャ共そっくりその侭、飲んで喋舌って充分堪能して、散会した。

出席の面々は

佐野賢一郎、永井行蔵、山田又一、足立弥一郎、平石恒夫、川村欽治、佐々木勤、福山忠司、藤島寛、高橋真二、池啓吉、燕福七、相馬富雄、長場末男、小林信二、田辺栄二、清水弥寿雄、斉藤希式

の十八名。

青山三八回生の集い

於　群馬県水上町

大正十五年から昭和六年の青山生活思い出の青陵健児が回を重ねる事四十二回目の会合を昭和四十四年九月十三日、十四日の二日間群馬県水上町の水明荘で催した。

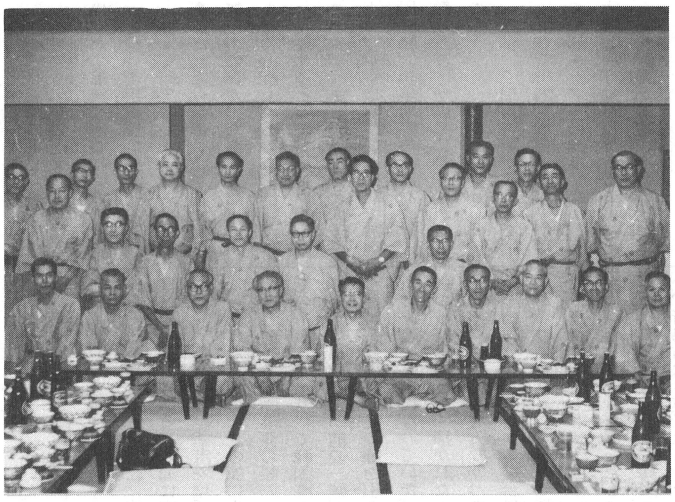
参加者三十二名、東京方面と新潟方面との合戦とも言うべきもの

勇士の面々が宿泊を共にして、夜を徹しての呑戦と乾杯と思い出と戦術の数々を尽して遂に引き分けとなった次第です。

東京勢十二名、新潟勢二十名で「天と地と」の如く上杉越後勢と北条関東勢の勇士の対面で、青山三十八回の名の様に、三十八年目の会合でした。

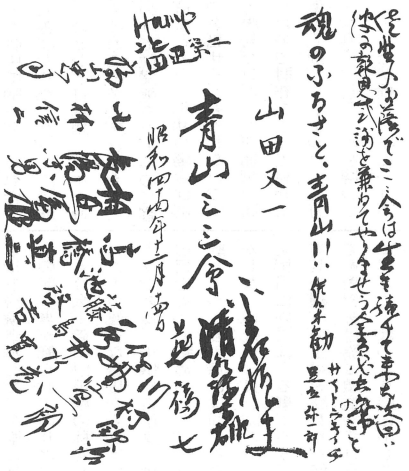
お互いに人生五十五年前後、去った人生の歩み、これからの再人生の話しで胸襟を開き、利根川の清流、谷川岳の峻峰を望みながら浩然の気を養い、青山の悠久の前途を「応援団」の「新潟中学」の校歌の合唱で祝福しました。

（渡辺義平記）



久し振りの顔も見える38回生達

色紙に寄せがき



山田又一

事務局だより

年頭雑感

輝かしい未来へのスタート、希望にもえる七〇年代の年頭にあたり、我が心のふるさとである同窓会が、昨今はやりのゲバに封鎖されぬよう自己批判してみた。

近年、東京に於ては、昭和も二ケタに近い生れの若い同窓諸兄がスクラムをがっちりと組んで、各種会合や企画にと東京青山同窓会を活発に行っている由、そんなニュースを聞くにつけても、母校の所在地、新潟に於ける各種会合にはまだまだ、若い発らつとした連中の集りが少い様子、淋しい限りである。卒業後日の浅い若い同窓もクラス会はそれぞれに行っていると聞く。同期という横につながる輪を、同窓というたての太い幹にむすんでもらいたいものである

来るべき夏の、本部総会は、若い幹事を中心に、若さのアイデアを生かした、新しい試みを行うべしとの、会長のご意向でもある。若もの一同、打ちつれて、参加しようではないか。

現在、年二回発行のこの会報をせめて、年四回、四季折り折りのニュースを盛り込んでお届けしたいものである。コンピューターエイジに、半年前のニュースでは時宜を逸する事も多い。しかし年四回の発行となると、先だつものは金、現在の会のふところ具合では少しさびしい。

明治大正生れの大先輩に寄附をあおげば事は簡単かも知れぬが、我々の同窓会はやはり、金五百圓也の年会費を収める会員が一人でも増すことによる盛り上りの中から生みだしたいものである。新潟在住の若手を初め全国に大活躍中の諸兄の、一層の奮起とご参加、ご支援を願うや切である。

編集後記

十一月八日未明から早朝にかけて、新潟高校の校舎内の変りよう

廃屋と化したかに見える学舎に足を踏み入れた鍵富会長もしばし茫然自失。

会報に残す記録にしてはあまりにも悲しい事実。それだけに事態を直視する姿勢が望まれたのである。斉藤幹事長の提唱で、「封鎖特集号」発行のための編集会議がもたれたのは十二月四日、校内外が平静にたちかえった時であった

事態を冷静に、なるべく客観的、にみつめたかった。校内外幹事の中から八名の編集委員を集め、延々四時間半にわたり、いろいろな角度から編集方針が協議された。

事件後、続々と感想や意見が寄せられていたが、賛否の声を公平に扱うため、同窓会員六名、PTA三名、生徒五名にしぼって「声」を載せることになった。その際、「封鎖に至るまでの事実の経過」「政治活動に関する学校の統一見解」を読んでもらい、判断に資していただいた。なるべく多くの会員の「声」を載せたいと思いつつも、紙面の都合でこのような特集記事に終ったことをお断りしたい

事はこれで片付いたとは決して云えないのである。会員の皆様の読後感、建設的な御意見をお待ちする次第である。

暗い記事の多いこの会報の中でも、「栄光燦たり」(水泳部)は、本校歴史に残る快挙をほうふつさせてくれる。せめてもの清涼剤としていただきたい。

本間氏の内容豊かな「ソ連見聞記」は、紙面の都合で次号連載とさせていただくことになります。乞御期待。

最後に、特集号のため御意見、御感想をお寄せいただいた会員諸氏に厚く感謝申し上げます。

（上杉）

会員の移動

（44年7月1日以降連絡のあったもの）

卒業回数	氏名	勤務先・職業	住所

[redacted]

卒業回数	氏名	勤務先・職業	住所

[redacted]

物故会員

卒業回数	氏名	死亡年月日
19	石黒芳雄	44. 8. 5
21	安藤剛	44. 9. 21
23	大石喜代二	44. 7. 15
25	吉川文一	44. 11. 8
27	畠野規矩平	44. 8.
28	高沢仁一郎	45. 1. 17
35	斉藤真衛	44. 8. 28
48	堀川英一郎	44. 11. 27
職員	高橋正信	44. 9. 29